古稀の記

山崎一穎

二〇〇九年三月、七十歳で定年を迎える。跡見学園女子大学文学部国文学科の専任講師として赴任したのは、一九七〇年四月である。三十一歳であった。三十九年間の大学教師生活を終えることになる。顧みれば、大学を卒業後、千葉県立船橋高等学校の夜間の定時制の専任教諭として八年間勤めて跡見へ移った。跡見学園女子大学の近代文学（散文）の最初の講座の担当者として迎えられた。

私の三十代は教育に、四十代は行政職に、五十代は研究に、六十代は再び行政職に比重が置かれて来た。ほぼ十年ごとに自己の立つ位置が変わり、緊張と新たなる決意を持つことになった。その意味ではマンネリにならなかった人生であったと言える。二〇〇六年三月学長職を退き、あと三年勤めて定年を迎えられると思った時から歯車が狂い始めた。

定年後は私の研究対象である森鷗外の生誕地、島根県鹿足郡津和野町の森鷗外記念館へ行くつもりであった。一九九五年三月、鷗外生家の裏に日本最初の森鷗外記念館が開館した。私はこの記念館の展示監修をし、現在運営協議会の会長を勤めている。ここにはあと十年研究すべき資料がある。

まさか二〇〇七年四月に跡見学園中学校高等学校の校長に就任するとは夢にも思わなかった。先任者の残任期間

一年ということであったのでまあいいかと思ったが、再任ということで大学定年後三年間は校長職を務めることになり、津和野定住は夢と消えた。

儘ならぬのも人生であると思っているが、それは健康面も同じである。六十四歳の時、癌の手術をした。それも三箇所癌に冒されているとは思ってもいなかった。計算できないのも人生であることを実感している。

大学受験も一年浪人し、大学院も修士、博士と一年浪人している。自分でも頭が良いとは思ったことはない。学問の楽しさを識ったのは、大学四年次の卒業論文を書いている時であった。「森鷗外の歴史小説研究」を五〇〇枚提出した時、もっと学問したいと思った。それ以来、鷗外一筋に資料を求め、資料に語らせる方法で研究を進めて来た。

私は還暦を迎えた時、自分の人生を振り返り秀才でもない私がそれなりにやってこられたのは、師や知友に恵まれたからに他ならない。それが私の学問の上でも、大学の行政の上でも人に恵まれたという思い切なるものがある。それ故に、私は「人は人に出会って人となる」という言葉を書いたり、話したりしている。三十九年間職場を同じくした教職員のみなさんに感謝したい。

教師としていい教師であったかどうかはわからない。私の定年に際してゼミの卒業生が最終講義とパーティを企画している。ゼミ生の総数五一四名で二六〇名ほど参加の意志を示していると聞いている。

野草料理研究部の顧問としては、熱心であった。それも野草酒を自分で作ることを楽しみにし、三十代は学生と合宿を共にした。食べられる野草をずいぶん覚えた。江戸後期の米沢藩主上杉鷹山に「かてもの」という著書がある。東北の飢饉の時、食べられる野草を紹介した本である。その後日本の陸軍省がこの種の本を出していることを知った。

研究者としては、藩札教授にだけはなるまいと努めてきた。鷗外は『本家分家』（生前未発表）に於いて、「博士

の祖父から博士の母を通じて、一種の気位の高い、冷眼に世間を視る風と、平素実力を養つて置いて、折もあつたら立身出世をしようと云ふ志とが伝わつてゐた」と森家の〈家風と立志〉について記している。

鷗外研究家たちは必ず引用するが、何故「冷眼に」世間を見下すのか、その理由を誰も明らかに出来なかった。私は一念発起して資料の発掘に努めてきた。資料を以てほぼ解明出来たと確信した時、十年経っていた。

二〇〇五年六月、某家の人から我が家は森家の親戚だと言われているが、よく分らないので調べてほしいと言って先祖書きを渡された。一年かけて読み解き、森家の分家であることが判明した。鷗外を生んだ本家とは交流がない。何故か。それは幕末に分家の方が禄高が高い。鷗外の父母はそれを承知しており、鷗外もそれを知っている。

本家は上京する。分家は益田に止まり、やがて韓半島の木浦（モクポ）へ移る。維新後の士族の運命を思いつつ、こんな発見は好奇心をくすぐる。

もう一つのエピソードを記す。それは森家の墓石の発見である。鷗外の墓所は、東京三鷹の禅林寺にある。森家の累代の墓域は、津和野の永明寺にある。墓石の発見は津和野での出来事である。

墓地から下った藪で小用を足すつもりで歩き始めると、倒れかかった墓石に足が引っ掛かった。仏罰が当ったかなと一瞬思った。私の靴の先が墓石の苔を削いだ。横棒が三本目に飛び込んだ。こんな所に邪魔な墓石だと舌打ちをし、立止まって苔を少し落した。倒れかかっていたので見えたのは裏面である。「森周庵子息　俗名　嘉吉墓」と読めた。

津和野では一八六七年寺社の統廃合が行われ、森家の墓所も分散した。一九一六年鷗外の意志で永明寺に集められて、今日に至っている。この度の発見の墓石は、一九一六年に取り洩れたものであろう。

永明寺の墓石の発見で興奮したが、すでに住職は知っていた。結果、寺僧が発見し、鷗外研究家の山崎が確認した旨を町長が森家へ伝えた。津和野町が墓石を森家の墓域に移し、供養しめでたく解決した。

町長が慰労会をしてくれた。私は少々調子に乗って、町長、森家の「過去帳」と照してあと三基不明ですと申し上げた。すかさず町長から山崎先生もう見つけないで下さいと言われ、一同笑ってお開きになった。

森家の「過去帳」を保存している光明寺で写真撮影を許して貰った。「過去帳」と「墓石」の照合から、従来の継承代数に疑義を呈したことも楽しい推理であった。光明寺のお嬢さんが跡見の短大の卒業生であると言われ、不思議な縁を感じた。

好きで調べ、読んできた鷗外ではあるが、まだまだ不明な点が多い。鷗外のドイツ留学の一八八八年ベルリンの都市の再現は、哲学者某氏の業績であり、多くの鷗外研究者も脱帽している。某氏こそ本学の神山伸弘さんである。

私は鷗外の伝記を『森鷗外論攷』にまとめた。学位論文である。この論文集には鷗外の留学時代が欠落している。『二生を行く人　森鷗外』で、家族がベルリン、ライプチッヒ、ドレスデン、ミュンヘン、再びベルリンと移動する鷗外宛に差し出す書簡について紹介し、日記と併せて鷗外の留学生活を記述した。しかし、その生活の現場、ベルリンの都市空間に及んでいない。蟹は甲羅に似せて穴を掘ると言う。己の能力を考えれば、今は神山論文をそうなのか、そうなんだと頷きながら楽しく拝見している。

酒席になると、嶋田英誠兄から神山さんを邪道へ誘い込んだ山崎は悪いと言われる。神山さんは笑って答えず。一言、文学者は調べないからなあと言う。

書き出したら止まらない。大学正門前に信号機が付いたのは、某先生の車の衝突事故からだとか、一号館の文学部教授会が使っている会議室前の大きい敷石は、都電が廃止された時の大塚の跡見学園前の都電の敷石だとか、二号館の所には学生寮があり、その裏道を逃げ出した豚さんが一匹歩いていたとか、校庭の土手には土筆や日本蒲公英が咲き乱れていたとか、枚挙に暇がない。

学生会、バス対策委員会主導で西武バス乗車拒否運動があったかと思えば、教職員組合がストを決断した折、研

究室の入口に〈こんな安い給与では教師なんかやってられない〉と書いて張り出した。翌日〈愛があれば〉と学生が書いた。粋な学生だと思いながらも〈愛のみでは生き得ない〉と書いた。思えば学生の方が大人であった。

教職員ストは三日間の授業中止をし、大学バスに〈スト決行中〉と書いて大学から茗荷谷の学園前まで走らせ、法人棟の前で決起集会を開催した時の組合の三役の一人であった。跡見学園女子大学私史は、これ以上は書いてはいけないと思いつつ筆を擱く。

教職員のみなさんにお世話になりました。ありがとうございました。

二〇〇九年一月十九日

――鷗外生誕の日――